

大項目	4	「地理総合」の授業法と小中高の接続教育			
中項目	4-1	「地理総合」におけるアクティブラーニング			
小項目	4-1-2	身近な地域を知ることから「地理」の扉を開き地域づくりへ参画する			
細項目 (発問)	4-1-2-3 修学旅行	高校地理教育におけるアクティブラーニングの実践例（修学旅行で地域調査）			
作成者名	長谷川直子	作成/修正年	2021/2023/2024	Ver.	1.2
キーワード 5~10 個程度	地域調査, 修学旅行, アクティブラーニング, フィールドワーク, 巡検, 地理総合				

発問の意図と説明

1.何のために地域調査を学ぶのか

一般的に高校での学習は(特に進学校で特徴的だと思いますが)大学入試が学びの目標となり、そこで出題されづらい地域調査については十分な時間が割かれなことが多いのではないかと想像します。こうなってしまう原因は筆者を含む大学側にもあるので心苦しいところです。本来の学びとは、多くの大学入試で問われている答えのある○×問題ではなく、答えのない問題を考えたり、あるいは問題自体を自ら発見したり、解決するところが重要であると思います。地域調査は、このような答えのない問題を考える、あるいは課題自体を自ら見つける数少ないトレーニングの場になると思います。大学へ進学する生徒もそうでない人も、最終的に社会に出たときに直面する問題は、答えのないものが多いと思います。そういった将来のトレーニングのために、この地域調査はあるのだと筆者は思います。

高校現場で日々教えておられる先生方には「釈迦に説法」だと思いますが、学びの効果を高めるには、学ぶ本人が、何のためにその学びをする必要があるのかをしっかりと理解していることが重要であるそうです(例えば、アーリック・ボーザー 2018)。筆者自身もそうですが、半期の授業の初めと終わり、そして毎回の授業でことあるごとにこのような「学びの目的」を繰り返し話します。地域調査においても、答えのない問題を自ら発見したり、解決策を考えることがどれだけ将来に役立つか、ということ、具体例をまじえながら自分ごととして捉えられるように伝えていただけると良いかと思ひます。

2.どうやって授業時間を確保するか

授業時間中に地域調査の時間を確保できる場合を考えてみます。

1. 地域調査を何のために学ぶのか、どの地域を対象にするのかを説明し(教員から)、その地域にどのような課題・事象がありそうかをブレインストーミングによって洗い出す(グループワーク)
2. 洗い出した課題や事象を KJ 法を使って構造化してみる
3. どのようなテーマで調査するかを班ごとに考える
4. そのテーマに必要な情報はどのような場所で入手できるか教員から概説し、実際に情報を入手してみる
5. 現地調査の調査項目を班ごとに考える
6. 現地調査
7. 現地調査のまとめ
8. 発表

という流れになるかと思ひます(図1参照)。実際には、KJ 法やブレインストーミングはやり始めると時間がかかるので、授 時間外に作業時間を取る必要があると思ひます。8 回も授業時間が取れない、という場合には、「はじめから先生がテーマを与えていきなり 4. から始める」、「現地調査項目を先生が決めて現地調査だけをやる」、などの時間短縮方法もあると思ひます。また、学校によっては校外実習へ行くハードルが高い場合もあると思ひます。そういう時には例えば行政や NPO、関係団体の方に話をしに来てもらうことで、ヒアリングに近いことを行うこともできると思ひます。

図表のページ

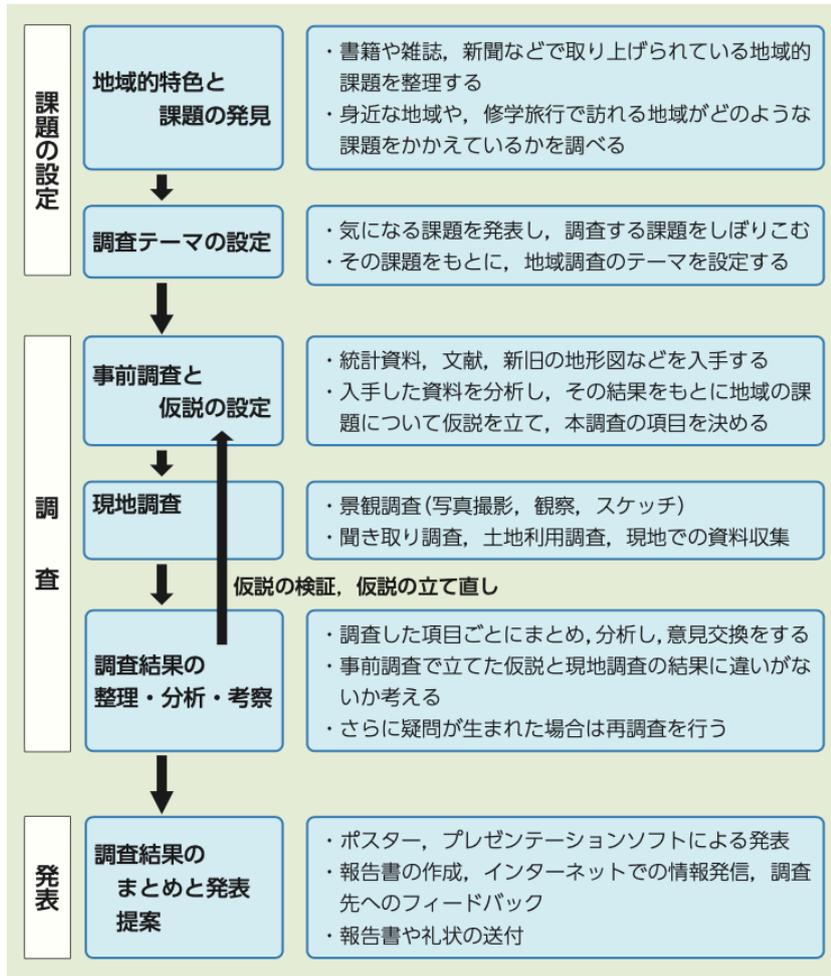


図1：地域調査の基本的な流れ

(出典：わたしたちの地理総合 (二宮書店) p193.)

ところで、限られた授業時間の中で、かつ、教えなければならないことが決められている中で、地域調査に回す時間が全く取れないこともあると思います。そんな時には、無理に地域調査をしようとしなくても、その中で学ぶべきポイント、例えば、下の青い枠で示したような事柄のうち どれか一つでもやってみるとか、あるいは、内容によっては他の単元の中でやってみることもできると思います。

- ・地域の課題にはどのようなものがあるのかを発見する (図2ブレインストーミング法)
- ・いろいろな物事の関連性がどうなっているのかを理解する (図3 KJ法, 図4が完成例)
- ・何かを知りたいと思った時にどんな情報をどこから調べてくるのかを理解して実践できる
- ・利害関係が対立する人同士でどうやって合意形成を図るのかを実践してみる

といった事柄のうちどれか一つでもやってみるとか、あるいは内容によっては他の単元の中でやってみることもできると思います。

もう一つの可能性として、地理総合の授業時間内に確保できない場合、修学旅行や校外学習の場を地域学習の場にすることも可能かと思えます(長谷川編 2018)。仮に旅行前に時間を確保できなかったとしても、多くの場合貸切バスや貸切電車で移動することが多いと思いますので、移動中に、旅行先の学習となるグループワークを取り入れることも可能だと思えます。

修学旅行などでは観光地へ行くことが多いでしょうから、観光客の視点、受け入れ側の視点など、教科書を参考に応用することができると思います。もし移動中の車内の時間を使うことができるなら、班別に車内の座席を指定し、行きの車内では、訪問先でそれぞれ調べたいことを考える、一人ずつどんな立場の人にどんな質問をするかを相談して決めておく(例えば、お土産物屋の店員さん、宿泊先の従業員の方などに困っていることを聞いてみるとか、現地へ来ている観光客になぜその場所へ旅行に来たのかを聞いてみるなど)。帰りの車内では、それらの結果を班内で共有した後、班ごとに簡単に発表をしてもらう。先生が仕切るのは大変でしょうから司会役も生徒にやらせるといいですね!発表は、バスならばマイクでできるでしょうが、電車だと声が届かないかもしれないので車内が難しければ後日学校で発表が良いかと思えます。その後全員で投票して1位のグループには先生からプレゼントを贈呈!帰りの車内も盛り上がること請け合い、いい思い出になると思います。さらに、現地で質問した方からはできれば名刺などをもらっておいて、班ごとに考えたアイデア、質問に対応してくださったお礼などを、1班1箇所ハガキ(先生が準備)で送ります。差出人は高校住所で先生にしておけば、もし返事が戻ってくればそれを後日生徒と共有、これも学びに繋がります。考えただけで楽しそうですね。いかがでしょうか?

将来のために地域のことを考える、といっても先のこと過ぎて想像できない、とか、自分たちは社会に出る前の高校生で何もできない、と思われてしまうかもしれません。これだと自分ごととして捉え切れず、課題を真剣に考えることができなくなってしまいます。高校生という立場でもアイデアを出したり、活動したりして何かを変えることができている例を知ってもらうことは、重要なことだと思います。ハガキを出したり何かのアクションをするとすると、その分高校生も真剣に取り組むでしょうし、その後に繋がることもあるかもしれません。どうしても心配な場合には、先生がハガキを回収して中身を見てから投函すればいいでしょう。そのほかの旅行先での学びの例として、手前味噌で恐縮ですがなぜその地域にそのご当地グルメがあるのかを地理的に考えてみる(尾形・長谷川 2018)や、行先が東京であればなぜそこに坂道があるのかを昭文社 2020の解説から学ぶこともできると思います。

図表のページ



課題の発見 ブレインストーミング法

地域にはどのような課題があるのか、思いつくものすべてをあげてみよう。次の項目を意識するとよい。

- ① 思いついた意見を自由にいう
- ② できるだけ多くのアイデアを出す
- ③ ほかの人の意見から連想、発展させる
- ④ ほかの人の意見を批判しない

図2：ブレインストーミング法

(出典：わたしたちの地理総合 (二宮書店) p192.)



調査テーマの設定 KJ法

調査するテーマを決めるためには、みつけた課題を整理して全体の構造を把握することが必要である。KJ法は、カードを使って情報を整理して図解化することで問題のポイントをみつけやすくする方法である(図1がその例)。

- 手順① 一つのカードに一つの事象を記入する
 手順② 書き込んだカードを並べる
 手順③ 関連のあるカードをグループ化する
 手順④ グループの関連性を考慮し再配置する
 手順⑤ グループ間やグループ内の関係性を矢印などで結びつける
 手順⑥ 問題全体の構造を把握する

図3：KJ法のやり方

(出典：わたしたちの地理総合 (二宮書店) p193.)

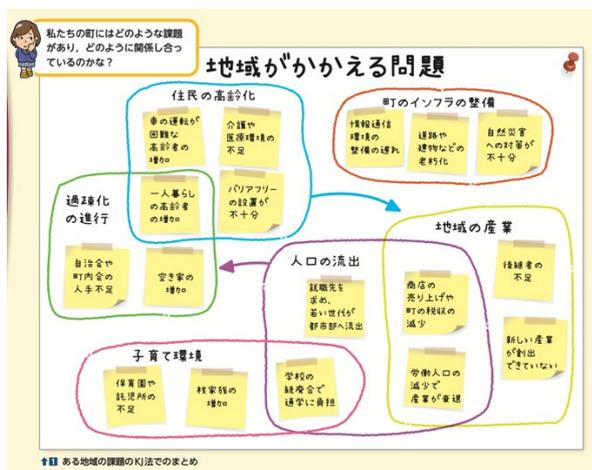


図4：KJ法の完成例

(出典：わたしたちの地理総合 (二宮書店) p192.)

3. 主体的な学習に対する心配→毎回がお試しだと思って気楽に授業をやってみる

これも現場の先生方には釈迦に説法かもしれませんが、教えている側は全く同じにやっているつもりでも、クラスによって反応が全く違い、うまくいった、と感じるクラスとなぜかうまくいかなかったな、と感じるクラスがあったりすると思います。特に、主体的な学習やグループワークではこの傾向が顕著に現れると思います。そのため、そういった授業形態に慣れないとなかなか踏み出しにくいと思ってしまうかもしれません。これは、例え同じクラスの中にいる生徒でも、(同じ話を聞いているのに) 受け止め方が千差万別だったりすることとも共通するのですが、完璧を目指さそうとせず、2. で示したような学習のポイントさえ生徒に伝わればそれで良い(もっといえば答えのない問題を考えてみるという経験ができればいい)、くらいの気楽な気持ちで取り組むと良いと思います。地域調査と同じく、授業のやり方もこれが正解、というものがないと思います。毎年受け持つ生徒は変わるはずなのに、マンネリ化した授業と先生が緊張して新しく取り組んでいる授業とでは生徒に伝わるものが違うように感じます。筆者も毎年試行錯誤で少しずつやり方を変えたりしています。教員が良い授業をすることも重要かもしれませんが、生徒自身が気になったテーマで主体的に学ぶことは、先にあげたアーリック・ボーザー (2018)によると何より本人にとって学習効果が高いものになるはずで、その「場を作ってあげる」だけでも十分なのかもしれません。そのような経験が生徒の将来の生きる力につながると考え、ぜひどこかでアクティブラーニングにトライしていただければと思います。

4. 地理 (科学) と社会の関係性を考えられるのが、地理総合であり、地域調査である

ちょっと発展的な話になるかもしれませんが、地理を含めた学校で学ぶ知識(広い意味での科学的知見)を、単なる知識としてではなく、社会との関係性として考えられるのが、地域調査であると思います。地域調査はたいいて教科書の最後に置かれていることが多いですが、それはその前までの単元で学んだ様々な知見を総動員して、それぞれのテーマごとに必要なものを自ら取捨選択し、なおかつ科学的な知見だけでは解決できない問題を考えるところにその醍醐味・難しさがあります。科学的知見だけでは解決できない問題とは、例えば人の価値観が入る問題(自然を保全すべきか開発するべきか)、政治的判断が入る場合(原子力の原理は分かっているでも原発を社会の中で運用していくかどうか)、そもそも科学的な知見にまだ不確定要素がある場合(新型コロナウイルスが出てきたばかりの時、その感染力や毒性などが良くわからない)といった問題群です。このような問題群を、科学を超える問題群としてトランス・サイエンス問題群と呼びます(小林2007)。現代社会は、高度な科学技術との結びつきが強く、こういった問題群を考えることは社会の中で生きていく上で必要な生きる術を学ぶことに他なりません。残念ながら日本ではまだこういった科学と社会の関係性を学校の中で教える機会が少ないのですが、筆者は、地理総合、特に地域調査はそういった役割を担える数少ない教科・単元と思っています。科学と社会の関係性については、村上陽一郎氏、池内了氏らが多くの一般向け新書や文庫を出されていますので、参考にしていただけたらと思います(例えば池内2012)。そして、池内(2012)が現在の科学の限界を唱え、これからのあるべき科学の方向性として「等身大の科学」を提唱していますが、この科学のあり方は、それぞれの地域のことをそれぞれの地域の人たちが自ら調査してデータを蓄積していくことであり、それは地理に他ならないと思うのです。

参考文献：

- アーリック・ボーザー 2018 「Learn Better」 英治出版. 392p.
 長谷川編 2018 「今こそ学ぼう地理の基本」 山川出版社.
 尾形・長谷川 2018 「ご当地グルメの地理学」 ベレ出版 218p.
 昭文社 2020 「東京 23 区凸凹地図」 189p.
 小林傳司 2007 「トランスサイエンスの時代」 NTT 出版. 288p
 池内了 2012 「科学の限界」 ちくま新書. 204p.

本文章は、二宮書店発行 (2021) 「地理月報」 No. 562 p2-5p. の一部を抜粋改変したものである。

<https://www.ninomiya-shoten.co.jp/chirigeppo/561> No. 561 までホームページ掲載)